

【野菜】の【高温】対策について

<7、8月>

宮崎県総合農業試験場専門技術センター

【夏秋野菜】

きゅうり、トマト、ピーマン、ゴーヤ、オクラ、さといも、かんしょ等

(1) 予想される被害状況

高温による草勢低下。

トマトでは落花や花粉稔性の低下による結実不良等を生じやすい。

品質低下

きゅうり：空洞果、日焼け果、くくれ果

にがうり：黄化、過熟果

トマト：裂果、尻腐れ果、空洞果

ピーマン：日焼け果、赤果

さといも：水晶芋、芽つぶれ

かんしょ：内部褐変症

にんじん：発芽率低下

(2) 事前対策

露地果菜類では、マルチの下にあらかじめかん水チューブを設置しておくなど、定植前からかん水ができるよう準備をしておく。

雨よけ栽培では寒冷紗等の被覆資材、敷ワラ、敷草、裨窓、換気扇等を活用し、ハウス内換気を行う。

ピーマン、きゅうり、にがうり等、比較的水を必要とする果菜類については、かん水チューブで1日1~2t /10 a 程度、トマトなど水を控える作物については、1日あたり1L/株を目安に少量多回数のかん水を行う。

オクラ、さといもは週 10~30 t /10aを目安に畝間（通路）にかん水を行う。

果菜類でかん水できないほ場では、蒸散抑制剤の利用や摘葉を行い、蒸散を抑えるようにする。

にんじんでは地温が40℃以上になると発芽率が著しく低下するため、前日（16時~）にかん水を行い、翌日の地温を40℃以下に抑える。

(3) 事後対策

かん水を行ってもしおれなどの症状が続く場合は、乾燥により畦内に水みちが生じ、作物が水を利用できない状況になっている事例や、乾燥しすぎて土壌表面で水がはじかれていることもあるため、土壌の乾燥状況を確認し、表面を軽く耕うんするなど、施用した水が速やかに浸透するように対策を取った上でかん水量や回数を増やす。また、植物体温が高い場合は、しおれを改善するために、葉水を行うことが有効である。

収穫は早朝等の気温の低い時間帯に行い、収穫後は涼しいところで農作物を管理する。

アブラムシ、ハダニ、鱗翅目幼虫の被害が多くなるので、薬剤散布を実施するが高温時に散布すると薬害を生じやすいので、前日に十分かん水し、薬散は夕方に実施する。